

願牛寺報

浄土真宗本願寺派茨城西組 大高山證誠院 願牛寺

No.2



新年あけまして
おめでとうございます



「悪人正機」の教え①

本当の自分の姿を知る

「善人がすぐわれ、悪人は

地獄に落ちる」ということを耳にされたことがあるのではないかと思います。それは、

仏教の「縁起」の考え方でいう「善因善果、悪因悪果」といつて、「良い行いをすれば、良い結果がくる。悪い行いをすると、悪い結果がくる」という因果応報の考えが根拠になっています。

この考えは、社会秩序を守るうえで有効ですので、昔から世の中に受け入れられました。子供の時に「悪いことはするなよ」とか「地獄に落ちるよ」とおばあさんに教えられた方もきつとおられるでしょう。その教えを皆さんは守られ、きちんと「善人」として社会生活を営まれてこら

れたのだと思います。

しかしながら、親鸞聖人の教えの特徴のひとつに「悪人正機（あくにんしょうき）というものがあります。この意味は、「悪人が仏のすくい

目当てであり、悪人こそがすくわれる」という意味です。先ほどの「善因善果、悪因悪果」の考え方は反することから、「えっ…！ 善人がすくいの目当ての間違いではないのか」と思われた方のため

に、今日は「悪人正機」のお話をしたいと思います。

さて、改めてお尋ねします。ご自身のことを「善人」と思えますか、「悪人」と思えますか？ こういう質問をすれば、ほとんどの方は、ご自身

は「善人」と胸を張ってこた

えられると思います。「その善人であることの理由はなんですか」と聞くと「人を殴つ

たり、傷つけたり、世間を騒がすようなことはしていない」とか「人に後ろ指をさされるようなことはしていない」とか言われると思います。これに対して、親鸞聖人はご自身のことを「悪人のなかでも最低の悪人」として「極重悪人」と称せられました。

聖人といわれる親鸞さまが極重悪人で、我々が善人であるって、変ですよ。

この違いは何かというと、私たちの考える「善悪」は、社会通念上のルールをベースにしているのに対して、親鸞聖人は、仏教の立場での「善

悪」で語っておられるという違いです。

社会通念上のルールとは、我々が社会生活を平和に円滑に過ごすために決めた基準のことで、具体的には法律や規則をいいます。法律や規則に違反し、人に迷惑をかければ、刑罰が課せられます。罰によつては裁判を受け「刑務所」に送られることもあります。

理解するので、我々にとって仏教がわからなくなるのです。これに対して、親鸞聖人の基準というのは、仏の教えにそつてさとりに近づくことが善であり、遠ざかることを悪とする基準です。この基準から見れば、我々の生き方は基準からは遥かに遠いといえましよう。



この罰をうけた人は、社会的には確かに「悪人」でしょう。実はこの社会通念上のルールを使って、親鸞聖人の言葉を

なぜなら、我々の生き方は煩惱にまみれ、仏の教えに背いているからです。煩惱にまみれている状態とは、少し例を挙げれば、自分の都合や勝手を常に正しいと考えて、それを守るために嘘をつくとか、怒る、愚痴をいうとかいう態度や、見えを張る、人を羨む、妬む、恨む、欲望を抑えられない、人を差別する、人におもねるといったことを日常的に繰り返している状態です。親鸞聖人もご自身の心を深く見つめられて、「いかに取り締つてみても煩惱にまみれている。しかも、それを反省して、いろいろな修行を行つて

みても、その煩惱にまみれた心もなくすことも、治すこともできない自分であること」に気づかれたのでした。しかも、煩惱にまみれていることを気づいたとしても、自分ではなかなか治すことができない、親鸞聖人のお言葉でいえば「いづれの行も及びがたき身」である存在であるので、親鸞聖人は自らを「悪人のなかの悪人」として「極重悪人」とされたのでした。(一方、自分の力で善行を積むことができ、さとり道の道を歩むことができる人を「善人」といい、親鸞聖人のいわれに従って、親鸞聖人のいわれを「悪人」とは、我々が一般に考えるような人間の作った法律や規則を守る、守らないとかの基準での話ではなく、もっと自分の内面をみつめたうえでの意味なのでした。しかも「そのような極重悪人なら、地獄行きが普通」と考えるのが我々の常識ですが、

まな
学ぶクエスト

本尊阿彌陀如来は「誠の如来」!

願牛寺のご本尊として伝承されてきているのが、この阿彌陀如来の掛け軸です。この掛け軸は、親鸞聖人が高山にご滞在の際に、寺の前の沼の蓮から取った蓮糸で織り上げた布に金泥で描かれたといわれるもので、「蓮糸の尊像」と呼ばれています。また、親鸞聖人ご滞在から100年ほど



後、本願寺第3代ご門主の覚如上人が関東ご巡教の際、願牛寺に立ち寄られ、このご本尊をご覧になり、ご随従の絵師に絵を模写させたといわれています。模写したご本尊の絵を、覚如上人は、その後浄土真宗のご門徒用のご本尊として使われることを許されたことから、願牛寺の阿彌陀如来の絵像の元となったと寺伝では伝えられています。このため、願牛寺のご尊像は「誠の如来」と言われています。

その常識に反して、「このどうしようもない極重悪人こそが、仏の慈悲によるすくい目当てだ」というのが親鸞聖人の「悪人正機」の教えです。なぜ悪人が目当てかというのと、「そのどうしようもないものをすくいたい」というのが仏の慈悲であり願いだからです。

編集後記

▼新年明けましておめでとうございます。新年の「新」という字の語源は「斤十木十辛」から成り、辛は刃物、斤は斧で木を伐つてつくる薪を意味します。その後「新しい切り口のさま」を意味するようになりました。

▼故司馬遼太郎氏は、「新」の字について、切ったばかりの切り口は樹液に濡れて、命がよみがえるような香気を放っている」と解し、この木の切り口の生々しさを「新」と表すと紹介しています。

▼昨年はご門徒様の一人となり、ご住職や坊守様と心おきなくお話をし、心温まる1年となりました。これからいろいろご教導いただき、豊かな充実した日々を過ごしたいと思えます。

▼元旦の朝には家族揃って家の仏壇に灯りを点じ、仏さまに年頭のお参りをして新年を迎えましょう。(高瀬)

牛木(ウシボック)の図

江戸時代の大高山願牛寺案内図



二十四輩順拝図絵 (竹原春泉齋画 1803年)

願牛寺の名前の謂れは、寺を大高山に建設するための資材を人々が運ぶときに、どこからともなく牛が現れ、代わりに材木を運んでくれて寺が完成したことを親鸞聖人が喜ばれて、「牛の願いで成就した寺」という意味で願牛寺と名付けられたということです。この牛はその後、寺前の沼に入ってしまった、そこから牛の形をした木が現れたというのが牛木の伝説です。

上の絵は、その牛木(寺の周りでは、ウシボックと呼ばれ、地名にも残っています)の図です。寺(右下)に屋根がかかれています(前の沼のなかに、牛木があり、それを桜の咲いた周囲の岸から人々が拝んでいるという図です)。

牛木の伝承は、親鸞聖人が大高山にご滞在の時の伝承として大切に伝えられ、江戸時代にはこの牛木を見るために全国からご参拝の方が訪ねられたと記録にあります。

後に牛木は沼から引き揚げられ、寺の本堂に安置されていましたが、明治時代に本堂が焼失した際に失われました。残念ながら写真はありませんので、牛木が実際にどんな形をしていたかを知ることができませんが、唯一の手掛かりとなるのが、この絵です。

(注) ご覧の絵は、森光英夫画伯に彩色していただいたもので原画には色がありません。